

プロフィール

ライナー・ホーネック ヴァイオリン Rainer Honeck, violin



撮影：ヒダキトモコ
提供：紀尾井ホール室内管弦楽団

1961年オーストリア生まれ。7歳よりヴァイオリンを始め、ウィーン国立音楽大学に学ぶ。81年ウィーン国立歌劇場管弦楽団／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に第1ヴァイオリン奏者として入団、84年には同歌劇場管のコンサートマスターに、92年にはウィーン・フィルのコンサートマスターに就任。

オーストリアをはじめとするヨーロッパ各地、日本、アメリカなどでソリストとして活躍。室内楽にも意欲的に取り組み、多数のラジオ、テレビ出演、CDも多くリリースしている。

近年では指揮にも力を入れており、2017年より紀尾井ホール室内管弦楽団首席指揮者を務めた後、2022年より同名誉指揮者に就任。

使用楽器は1725年製のストラディヴァリウス“シャコンヌ”（オーストリア国立銀行からの貸与）。



菊池 洋子 ピアノ Yoko Kikuchi, piano

2002年第8回モーツァルト国際コンクールにおいて日本人として初めて優勝、一躍注目を集めた。その後、ザルツブルク音楽祭に出演するなど国内外で活発に活動を展開し、いまや実力・人気ともに日本を代表するピアニストの一人である。

前橋市生まれ。故田中希代子、故林秀光の各氏に師事。桐朋学園女子高等学校音楽科卒業後、イタリアのイモラ音楽院に留学、フランコ・スカラ、フォルテピアノをステファノ・フィウツツイに師事。国内主要オーケストラとの共演をはじめ、ザルツブルク・モーツァルテウム管、ハノーファー北ドイツ放送フィル、ベルリン響等と共演。

最近ではバレエとのコラボレーション公演にも出演し、世界的バレエダンサー ディアナ・ヴィシニョーワや吉田都、上野水香ほかと共演。CD録音も活発に行い、2023年には「J. S. バッハ：ゴルトベルク変奏曲」（エイベックス）をリリースした。

前橋市 Presents 舞台芸術祭芸術監督。第1回上毛芸術文化賞（音楽部門）受賞。2007年第17回出光音楽賞受賞。

2023年3月よりウィーン国立音楽大学にて後進の指導に当たる。

菊池洋子オフィシャルホームページ yokokikuchipf.com

Rainer Honeck, violin ライナー・ホーネック & 菊池洋子

Yoko Kikuchi, piano

デュオ・リサイタル Duo Recital



2024年3月16日(土)

15:00 開演

秋篠音楽堂

《お問い合わせ》

秋篠音楽堂

〒631-8511 奈良市西大寺東町2-4-1 ならファミリー6階

TEL 0742-35-7070 (10:00~17:00)

<https://www.akishino-ongakudo.com>

主催 秋篠音楽堂運営協議会

プログラム

W. A. モーツァルト

ヴァイオリン・ソナタ 変ロ長調 K. 378

I Allegro moderato

II Andantino sostenuto e cantabile

III Rondo. Allegro

F. シューベルト

ヴァイオリン・ソナタ イ長調 D574

I Allegro moderato

II Presto

III Andantino

IV Allegro vivace

休憩

～クライスラーとめぐる世界一周の旅～

《イタリア》前奏曲とアレグロ

《ドイツ》羊飼いのマドリガーレ

《チェコ》スラヴ幻想曲

《ハンガリー》ジプシー奇想曲

《フランス》ルイ13世のシャンソンとパヴァース

《スペイン》スペイン舞曲

《中国》中国の太鼓

《アメリカ》シンコペーション

《ウィーン》ウィーン風狂想的幻想曲

クライスラー作・編曲

曲目解説

ウィーンにゆかりの深いふたりがナビゲートする音楽の旅

20代からウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターとして活躍を続け、日本でも知名度の高いヴァイオリニストのライナー・ホーネック。そして2002年に日本人として初めて第8回モーツァルト国際コンクールで優勝、ザルツブルク音楽祭に出演し、ウィーンでもリサイタルを開くなどヨーロッパ各地と日本で演奏活動を行っているピアニストの菊池洋子。今回はふたりがウィーンを起点にした音楽の旅へ皆さんを誘うリサイタル。それはウィーンで活動したモーツァルト、シューベルト、クライスラーの作品による、18世紀から20世紀への時間を超えたラグジュアリーな旅だ。さあ、荷物も置いて、一緒に出かけよう。

モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ 変ロ長調 K. 378

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）はザルツブルク生まれだが、幼少期からヨーロッパ各地を巡る長い旅を何度も経験し、それを彼の音楽に活かした。彼がウィーンに定住するようになったのは1781年。亡くなる1791年まで、ウィーンで暮らした時間は、彼の短い人生の本当に最後の時期だったが、その間に現在も演奏されている数々の傑作を書いた。

モーツァルトの生きた時代、現在の私たちがイメージするような「ヴァイオリン・ソナタ」はまだ無かった。18世紀当時の楽譜には「ヴァイオリン伴奏付きのピアノ・ソナタ」と書かれることが多く、モーツァルトの場合もそうだった。「変ロ長調 K.378」のソナタはウィーンに移り住む前のザルツブルク時代（1779～81年）に書かれたと推定されている。出版されたのはウィーンで1781年のこと。モーツァルトの作品集としては「作品2」とされ、実業家の娘でモーツァルトのピアノの弟子でもあったヨゼファ・アウエルハンマー嬢に献呈された。全6曲の作品集で、この「変ロ長調」は第3番となる。ウィーンで出版された最初のモーツァルトの作品集となった。

それまでに書いていたヴァイオリンとピアノのためのソナタ以上に、この曲ではヴァイオリンの比重が大きくなっており、3つの楽章のなかで、ヴァイオリンとピアノがお互いに語り合うような親密さも持っている。第2楽章のみ変ホ長調を採用している。

シューベルト：ヴァイオリン・ソナタ イ長調 D574

ウィーン郊外に生まれたフランツ・シューベルト（1797～1828）は皆さんご存知のように「歌曲の王」と呼ばれるが、最近ではむしろ交響曲、晩年の長大なピアノ・ソナタ、「死と乙女」を代表とする弦楽四重奏曲など、オーケストラや器楽曲ジャンルでの魅力再発見が続いている。あまり注目を集めて来なかったヴァイオリン曲でも、3曲のソナチネをはじめ、このイ長調の「ヴァイオリン・ソナタ」も多くのヴァイオリニストが取り上げる作品となった。

1817年、シューベルトが10代最後の時期に書いたとされるこのイ長調のソナタは別名「グラン・デュオ」とも呼ばれ、同時代に生きたベートーヴェンとは違った豊かな音楽性を持つ。その後のロマン派の作曲家たちのヴァイオリン・ソナタの先取りと言っても良いような多彩な作品である。

全4楽章で、第2楽章プレスト、第3楽章アンダンティーノにはシューベルトらしい軽快さと、繊細な和声変化の面白さがあり、両端楽章はがっしりとした建築物をイメージさせる。オーストリア帝国以外には旅行しなかったシューベルトだが、この作品の中では広大な音楽の平原を歩いている作曲家の姿が浮かび上がるようだ。

～クライスラーと巡る世界一周の旅～

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヴァイオリンの巨匠として活躍したフリッツ・クライスラー（1875～1962）はウィーン生まれ。活躍の舞台はヨーロッパにとどまらず、アメリカ大陸にも広がり、来日公演を行ったこともある（1923年）。国籍もオーストリアからフランス、そして最後はアメリカ国籍を取得して、ニューヨークで亡くなった。

彼は作曲家としても数多くの作品を残した。現代のヴァイオリニストにとって、クライスラーの残したヴァイオリンの小品は常に携帯できる愛用品のようなイメージではないだろうか。ヴァイオリンを習ったことのある人は、一度は彼の小品に取り組んだこともあるのでは。ここではホーネックと菊池のふたりが選りすぐった小品を集めて、クライスラーの招く世界を旅してみよう。

まずイタリアへ。「前奏曲とアレグロ」はイタリア18世紀のヴァイオリニスト&作曲家であったブニャーニのスタイルを模して書かれた作品で、前奏曲の中に感じる微かな憂いが18世紀的な世界を思わせ、アレグロにイタリアの明るい空を感じる。ドイツへ移って「羊飼いのマドリガーレ」を。マドリガーレ（あるいはマドリガル）は北イタリア発祥の多声の音楽だが、それがドイツに入り、素朴なメロディとなって行った。その民謡的なメロディを使った小品だ。ドイツのお隣チェコは、距離的にはとても近いのに音楽的な個性はかなり違う。チェコ国内のボヘミア地方はスメタナ、ドヴォルザークなどの作曲家を生んだが、そのドヴォルザークの2つのメロディを活かした作品が「スラヴ幻想曲」である。さらにそのお隣のハンガリーも民族のルーツがヨーロッパ系ではなく、様々な民族が行き来した場所。その中にはいわゆるロマ（ジプシー）の人々も多かった。その哀切なメロディと独特のリズムを活かしたのが「ジプシー奇想曲」である。

今度はちょっと西へ移動して、クライスラーも国籍を取得したことのあるフランスへ。「ルイ13世のシャンソンとパヴァース」はルイ13世の時代に活躍した作曲家ルイ・クーブランのスタイルを借りたお洒落な作品だ。フランスの南に位置するスペインでは「スペイン舞曲集」を楽しもう。フラメンコに代表されるようにスペインはリズムの宝庫、そしてたくさんの舞曲が残されている。さらに一気に海を渡り、東洋の中国へ。クライスラーの「作品3」として有名な「中国の太鼓」はサンフランシスコ旅行中にクライスラーが聞いた中国音楽をベースに作られたと言われる。そしてアメリカではジャズのリズムを取り入れた「シンコペーション」を。

最後には再びオーストリアに戻り、ウィーンの味わいをたっぷり感じさせてくれる「ウィーン風狂想的幻想曲」を聞こう。「ウィーン風狂想的幻想曲」は1948年の作品だが、華やかな文化が華開いた19世紀のウィーンを回想するような懐かしさを感じられる。ウィンナ・ワルツは19世紀初頭にウィーンで流行し、ナポレオン戦争後にヨーロッパ首脳が集まった会議でも、みんな会議そっちのけでワルツに夢中になったことから「会議は踊る、されど進まず」（ウィーンの貴族の言葉）という歴史的な名言を生み出した。クライスラーもその言葉を知っていたに違いない。

片桐卓也（音楽ライター）